跡見学園女子大学紀要　第23号（1990年３月15日）

V. Mathesius の機能的文構成における二，三の基本的概念について

(On Some Basic Ideas in Vilém Mathesius' Theory of Functional Sentence Perspective)

Itaru Iijima
飯　島　　周

Summary

This paper examines some basic ideas in the theory of Functional Sentence Perspective (FSP) systematized by Vilém Mathesius, one of the founders of the so-called Prague Linguistic School.

Mathesius suggests that the FSP level should be separated from the grammatical level to analyze a sentence and that the ways to solve the problems caused by conflicts between the two levels are characteristic in every language. Inspired by Henri Weil, he defines the two constituents on the FSP level (i. e. the starting point and nucleus of utterance), and maintains that the sentential elements should be arranged by certain principles (i. e. the subjective and objective word orders).

To test the above ideas, some examples are taken from Czech, English, and Japanese. Especially, the Japanese particles *WA* and *GA* seem interesting from the viewpoint of FSP, which must be discussed further.

Key Words : Discourse, Functionalism, Language, Linguistics, Prague School

いわゆるプラハ言語学派の中心人物の一人であった Vilém Mathesius (1882—1945) の多方面にわたる業績の中で，現在“機能的文構成”(英訳形 Functional Sentence Perspective=FSP[1]) として知られる分析法の開発は特に注目に値する。ただし，わが国では，この分析法の基本的な問題について，まだ十分な理解，又は説明がなされていないと思われる。その紹介も，多くは米・英の学者たち[2]の著作や解釈を経由して行われ，又英語を中心として説明される傾向が強い。

Mathesius は，その論文の多くを小言語であるチェコ語で発表しているので，国際的な場面での知名度は，Vachek の諸著作（参考文献を参照されたい）にも拘らず，R. Jakobson (1896—1982) や N. S. Trubetzkoy (1890—1938) に比してかなり低いが，独創性に富んだ着想を各所に示している。特に，Mathesius (1911), (1929), (1939) は，基本的な研究の出発点として，十分な検討を要する。たとえば，上述の3論文中，最初のものが論じているのは，言語現象の持つ“潜在性”，つまり状況や時代に応じて顕在化し得る，その言語内で働らくさまざまな力の貴重な指標となり得る“ゆれ”(kolísání) の問題である。この論文では，言語を構成する各レベル，すなわち音声，形態，統語の各面における“ゆれ”が，統計的手法の援用によって分析されている。これは，全体として，言語における諸現象のダイナミズムの認識と機能的なアプローチの必要性を説くもので，当時のやや硬直化した青年文法学派的な主張と対立する，共時的研究の重要性の指摘でもある。第2の論文は，その標題通り，機能言語学のテーゼで，機能的分析の意義と新しい言語学，特に通時的系統論的比較法ではなく，共時的構造的比較による言語性格学の提唱に及んでいる。この中にはすでに機能的文構成（ただし，Mathesius の用語では“実勢的文構成”とする）の要点も注意深く述べられており，言語の文化性も強調され，生きた現実の言語的研究に新言語学の真価がある，という言葉で結ばれている。そして第3の論文は，一般に Mathesius の FSP に関する代表的な意見の表明として知られている。この論文は，参考文献表に示されるように，プラハ学派の国内機関誌 *Slovo a slovesnost*（言葉と文学）に発表された小さなものであるが，そこに含まれる基本的概念は，当時としても十分に改革的なものであった。これは，さらに修正発展を重ねて，より射程の大きなものになっている。以下，この論文を中心にして，その基本的な概念の検討を試みたい。

この第3の論文「いわゆる実勢的文構成について」は，8パラグラフに分かれ，標題通り，FSP について手順を踏んだ説明がなされている。もちろん原文はチェコ語なので，日本語への訳注に準ずる形で必要箇所を引用し，議論を進める。まず，冒頭に基本的な定義が示されている。（以下，圏点は訳者による）

(1)　実勢的文構成は，文の形式的構成と対置される必要がある。形式的構成が文法的要素から

成る文の構造と関係するのに対して，実勢的文構成はその文を生じた事物的環境の中でその文が分析される方法と関係する。実勢的文構成の基本的要素は，発話の出発点（východiště výpovědi）——すなわち，与えられた状況の中で知られているか，又は少なくとも容易にわかるもので，話し手が出発点としているもの——および発話の核（jádro výpovědi[3]）——すなわち，発話の出発点について，又は発話の出発点と関連して，話し手が述べているもの——である。（第1パラグラフ）

ここで明らかにされているのは，言語の持つ重層性，又は分析のレベルの分離の問題である。すなわち，形式的文構成は文法のレベル（言語体系内に限定される一般的情況）に属し，実勢的文構成は事物的環境のレベル（言語外の事物を含めた個々の実際的情況）における言語的反応に関係する。このようなレベルの分離は非常に困難であるが，F. d. Saussure のラング（langue）とパロール（parole）の関係などに見られることと共通性があろう。Mathesius（1961）によれば，“ラングとは道徳的慣習のように，理想的現実に属する価値の体系で…話し手の中に間違いなく存在する規範の体系として意識される”。（同書 p. 9）パロールはラングを背景とした個々の行為であるから，実勢的文構成と関係すると思われる。この両者の分析のレベルには相違があり，それぞれのレベルにおける異なった概念と用語の体系を要求する。そこで，Mathesius の述べている形式的文構成と実勢的文構成のそれぞれは，現在の言語研究で一般に文法論と呼ぶものとプラグマティックス（Pragmatics）と呼ぶものとのそれぞれで，分離して扱う問題とすることが可能である。しかし，基本的認識と術語の明確な定義に不備があるらしく，方々で混乱を生じている。この混乱を明確に指摘して啓示的なのは Daneš（1964）であるが，Mathesius もこの論文中ですでに次のように記している。

(2) 実勢的文構成は，言語学がすでにずっと昔に注目したが，組織的には追求されなかった問題である。その理由は，形式的文構成に対するその関係が明らかでなかったからである。実勢的文構成について最も多く書かれたのは，たとえこの呼び方（実勢的文構成）ではなかったにしても，大体19世紀の第3四半期であった。…中略…発話の出発点を，その当時，専門家たちは心理的主語，そして発話の核を心理的述語と呼んでいた。それらは幸せな用語ではなかった。なぜなら，一つには，発話の出発点は——心理的主語という呼び名によってそう思われるであろうが——常に発話の主語とは限らないし，又一つには，心理的主語と心理的述語という呼び名が文法的主語と文法的述語とにあまりにも近いことが，本質的にさまざまに異なるこの2者の明確な区別に決して役立たないからである。二つの用語の心理学的色彩は，その他に——そう思われるのだが——その問題全体が公式の言語学の視野から退けられるのに寄与した。これは残念なことである。なぜなら，まさに，実勢的文構成および形式的文構成の間の関係は，

それぞれの言語における最も特性的な事柄の一つであるから。(第1パラグラフ)

19世紀における実勢的文構成検討の具体的な例として，上記引用中の省略箇所には，Weil (1844[4]) があげられている。この著作は，標題通り語順を中心にしての研究であるが，ギリシア語・ラテン語に限らず，英・独・仏の現代語の語順も取りあげ，〈発話の〉出発点 (le point de départ)，発話の標的 (le but du discours) という概念と用語を設定している。分析の資料としてあげられている実例の一つは，一部修正を加え単純化した[5]が，次のラテン語の文で，Weil によれば，a. の出発点は Romulus；b. の出発点は Rome；c. の出発点は建設の概念 (l'idée de fondation) である。

(3) a. Romulus Romam condidit.
(ロムルスはローマを建設した。)
b. Romam condidit Romulus.
(ローマはロムルスが建設した。)
c. Condidit Romam Romulus.
(ローマを建設したのはロムルスだ。)

すなわち，(3) a, b, c のそれぞれにおける各要素の文法的関係はすべて同一であるが，出発点と核とはそれぞれ異なる。この点についての Weil の原理的な説明は“シンタックス的進行は観念の進行ではない”(La marche syntaxique n'est pas la marche des idées.) という立場で示され，“シンタックスは外的な事物と関係する；単語の継起法は話す主体と，人の精神 (l'esprit) の動きと関係する”こと，“ある命題文中には二つの異なる動きがある；一つはシンタックスの関係によって表現される客観的な動き (un mouvement *objectif*)；一つは語順によって表現される主観的な動き (un mouvement *subjectif*)”であることが記されている。さらに，語順に関して諸言語が2種に，すなわち“自由な構造の言語”(les langues *à construction libre*) と“固定的構造の言語”(les langues *à construction fixe*) に大別されることが説明されている[6]。

これらの記述は，Mathesius の思考にかなり影響したと思われ，Mathesius の論文の何ケ所かに類似の意見が見られる。実際に，その実勢的文構成についての組織的研究の最初のものとされ，この方面の文献集として貴重な Firbas, Golková (1976) の筆頭にある Mathesius (1907) には，Weil のこの論文に対する高い評価がある。

Mathesius はこの問題を，特に英語とチェコ語の対比を中心にして考察し続け，Mathesius (1961) では要約的な分析を示した。同書 p.91 以下には具体的な例と共に原理的な問題が説明されている。ただし，Mathesius (1939) の用語の中での“出発点”は陳述の“基礎”(základ)

に改められた。——これらの用語はさらに再検討され，たとえば Firbas によれば，伝達動力（výpovědní dynamičnost，英訳形 Communicative Dynamism=CD）を基準としてテーマ（英訳形 Theme）とレーマ（英訳形 Rheme），さらに中間的なトランジション（Transition）を設定する体系(7)になっている。——

前記(2)の引用の最後の部分にあるように，実勢的文構成と形式的文構成の間の関係，又はそれらの葛藤とその解決法を，Mathesiusは各言語の特性の一部と考えている。これらは一種の言語性格学，又は類型論（タイポロジー）的考察の対象となる。これについての問題は Sgall, Hajičová, Buránová (1980) に要約され，飯島 (1983) で一部扱われているが，Mathesius (1961) の基本的な意見は次のようである。

文と呼ばれるものは，話し手がある現実に対する立場を表明する手段である。最も普通の文のタイプである平叙文は，あることの陳述であり，大多数の文は二つの基本的な内容的要素，すなわち陳述の基礎と陳述の核に分かれる。——単一要素文とされるものは除く。——正常な2要素文は基礎と核から成り立つが，平静な陳述の場合は客観的語順，すなわち基礎→核であり，興奮した場合には核→基礎となる。この実勢的文構成は形式的文構成と厳密に区別すべきだが，古い昔には，諸言語において基礎と文法的主語が一致していたかも知れない。今日では，諸言語における実勢的構成と形式的構成は多くの場合不一致である。この不一致，又は葛藤は解決されなければならない。なぜなら，各言語において，文法的形式が確立しており，実勢的構成の役割は，この形式を瞬間的な状況の要求に応じて利用することだから。各言語におけるその解決法は，それぞれ特徴的である。たとえば，現代英語では語順が文法的に固定化しており，文法的主語が文法的述語の前に置かれるのが原則的になっている。従って，現代英語では，形式的文構成と実勢的文構成の間の葛藤を避けるため，文法的主語と陳述の基礎をできるだけ一致させようとする。そのため，受動態やいわゆる形式主語を多用する。一方，チェコ語は（他の屈折の多い言語と同様に）語順が文法的に固定化されていないので，実勢的文構成は語順の変更によって示すことができる。これは両言語の性格的特徴として対照的である。（そして日本語は，この点に関して，筆者の考えでは両言語の中間にあるようだ。飯島 (1983) を参照されたい。）

上記の点を確認するために，Mathesiusのあげている例を利用し，さらに日本語を加えて検討する。(4) a. b. c. は，それぞれ英語，チェコ語，日本語で，ほぼ同じ実勢的情況における言語的反応である。つまり，それぞれの言語における同様な実勢的文構成と考えられる。より具体的には，波線部はそれぞれ陳述の基礎を示し，残りの部分が核を示す。

(4) a. Pa wrote this letter.

b. Tatínek napsal tenhle dopis.

c. ぱぱハ　コノ手紙ヲ　書イタ。

上記(4) a. b. c. では，いずれもそれぞれの文法的主部と陳述の基礎が一致している。すなわち形式的構成と実勢的構成との間の葛藤を感じにくい例である。いわば自然的語順（後述）と言えるであろう。しかし，これらを次の(5) a. a′. b. c. c′. と比較すれば，それぞれの葛藤およびその解決法が明らかになる。

(5) a. This letter was written by Pa.

a′. It was Pa who wrote this letter.

b. Tenhle dopis napsal tatínek.

c. ぱぱガ　コノ手紙ヲ　書イタ。

c′. コノ手紙ヲ　書イタノハ　ぱぱダ。

この(5) a. a′. b. c. c′. は，(4) a. b. c. とは異なるが，それぞれ同様な実勢的情況を示している。すなわち，“この手紙を書いた人物がいること”が基礎となり，“それは誰か”が核になっている。英語の場合，音声的手段を別とすれば，受動態への転換，すなわち(5) a. 又は形式主語 *It* による迂言的表現，すなわち(5) a′. によってその実勢的状況に反応することになる。チェコ語の場合は，単に語順の変更，すなわち(5) c. でよい。日本語の場合は，形態論的手段，すなわち助詞を「ハ」から「ガ」に交代させること，すなわち(5) c.，又は(4) c. の核の部分の名詞化による迂言的表現，すなわち(5) c′. によって処理できる。

ここで特に注意したいのは，(4) b. および(5) b.，(4) c. および(5) c. のそれぞれの組で，各構成要素間の文法的関係および機能には，それぞれ変化があるとは言えないことである。すなわち，(5) b. の tatínek は，文尾にあって実勢的文構成のレベルでは核になっているが，(4) b. の文頭にある tatínek と同じ役割，つまり形式的文構成のレベルでの文法的主語としての機能を果している。すなわち，形式的構成の上では，単に語順が変っただけである。同様に，(5) c. の「ぱぱ」は，(4) c. の「ぱぱ」と同じく文法的主語である。従って，日本語の助詞「ハ」と「ガ」の機能を，この点だけに限定して説明すれば，形式的文構成のレベルでは同じであるが，実勢的文構成のレベルでは，「ハ」は基礎を標示し，「ガ」は核を標示する，ということになる。しかし，全体としての語順は変らない。多くの日本語学習者にとって「ハ」と「ガ」の使いわけが難問になるのは，他にも理由があると思われるが，主として上述の区別がかなりわかりにくいためであろう。別の言い方をすれば，この「ハ」と「ガ」の使いわけは日本語の特性の一部となっており，Mathesius の用語での言語性格学，又は対照言語学における要点とされ得る。

このように，実勢的文構成のレベルの設定は，従来とは異なる言語の分析法を生み出したが，この分析法は，さらに，いわゆるテキスト言語学，又はディスコース分析にも有用であろう。Mathesius (1939) には，これに関して次のような説明がある。

(6) すでに述べられたように，発話の出発点は，必ずしも又，文中に含まれる発話の主題(thema[8]) とは限らないが，非常に多くの場合に主題であることを付け加える必要がある。それが最も明らかに見られるのは，単純な，相互に関連する語りの中で，その場合，発話の出発点は，通例，それに先行する文から引き出される主題である。たとえば，*Byl jednou jeden král/a ten měl tři syny. Nejstaršího z nich napadlo, že si půjde do světa hledat nevěstu.*（むかし一人の王がいました。そしてその王は3人の息子を持っていました。かれらの中で一番年上の子に，お嫁さんを探しに世の中へ出ようという考えが浮かびました。）ここでは，見られるように，2番目の文中の陳述の出発点は，最初の文中に明示的に含まれた主題（*král*＝王）であり，3番目の文中の出発点は，2番目の文中の *tři syny* に暗示的に含まれた主題（*Nejstaršího*＝一番年上の男を〈対格〉）である。この語りの始まり自体には，知られていると前提されるものはまだ何もないが，一般的な時間の確定を伴なう存在文がある。すなわち：*byl jednou jeden král.*（jednou＝ある時；かつて。）実勢的構成の立場からは，この文を分節されない発話と考えることができる。なぜなら，この文は実際に，付随的な語を伴なう陳述の核だけしか含んでいないからである。不定の時の確定（*jednou*）は，全体的に背景に退けられる。そこでこの文は，このような確定の全くない〈次の〉文と内容的には全く等しい。すなわち：*Byl jeden král a byl tak rozumný, že i všem živočichům rozuměl, co si povídali.*（一人の王がいました。そして〈その王は〉とても賢くて，どんな生き物でも，何を〈仲間で〉話し合っているか，わかるほどでした。）…中略…時に応じて，もちろん，このような最初の存在文は，さまざまな導入の仕方を与えられる。それらは，物語の始まりに用いられ得る関連事項の多様性を興味深く示してくれる。口頭での物語の際に，最初の存在文は，さまざまな表現で物語に入って行く情況と結び付けられるが，それらの一般的な意味はおそらくこうであろう：*Chcete na mmě pohádku a tady ji tedy máte.*（きみたちはわたしにおとぎ話を〈してくれと〉望んでいる。今ここできみたちに〈して〉あげる。）これらの表現は，語り手が，語り手としての自分の位置をどのように設定するかによって異なる：たとえば *Tak byl jednou jeden král... Tak tedy byl jednou jeden král.*（さて，むかし一人の王がいました…さてそこで，むかし一人の王がいました。）この情況的な導入の表現が拡大されれば拡大されるほど，それだけ独立性を獲得し，それ自身のメロディーの終末部で〈独立した〉文に変化させることができる。たとえば：*No tak tedy. Byl jednou jeden král.*（そう，さてそこで。むかし…）（第2パラグラフ）

上記の引用中の例で明らかと思われるが，テキストの発展における実勢的文構成の分析は，さらに諸言語の特性の確認，さらに，ある種のわかりやすさ，又は広い意味での結束性(Cohesion)の手がかりになるであろう。やや煩雑ではあるが，引用文中の実例を利用して，チェコ語，英語，

日本語について検討を重ねる。

(7) a. *Byl jednou jeden král a ten měl tři syny. Nejstaršího z nich napadlo, že si půjde do světa hledat nevěstu.*

b. *Once there was a king and he had three sons. It occurred to the eldest of them that he would go into the world to look for a bride.*

c. ムカシ　一人ノ王ガイマシタ。ソノ王ハ　息子ヲ３人持ッテイマシタ。ソノ中デ　一番年上ノ息子ニハ，オ嫁サンヲ探シニ　世ノ中ヘ出テミヨウトイウ考エガ　浮カビマシタ。

(7) a. の各文の関連性については，すでに(6)の引用文中に説明があったが，(7) a. とほぼ同じ語りの内容を持つ(7) b.，(7) c. の場合も，ほぼ同じ説明が可能である。ただし，各言語の性格の差については補足が必要であろう。たとえば，(7) a. の最初の文では，文頭に動詞が置かれているが，これは(7) b.，(7) c. には見られない特徴である。又，(7) b. の３番目の文では形式主語による迂言法が用いられているが，*the eldest of them* を文法的主語とする表現も可能であろう。(7) c. については，２番目の文で用いられている「ソノ王」を「カレ」と代名詞化し，「カレハ　３人ノ息子ヲ　持ッテイマシタ」という表現にしてもよい。（もっとも，このようなおとぎ話の中で「カレ」を用いるのは文体論的に不適切な感がある。）又，「ソノ王ニハ３人ノ息子ガアリマシタ」も自然な日本語であろう。３番目の文は「一番年上ノ息子」を文法的主語にして書きかえることができる。（たとえば，「一番年上ノ息子ハ…ト思イツキマシタ」など。）さらに，(7) c. の各文には動詞的要素を文末に持つという特徴がある。

しかし，(7)の a. b. c. のそれぞれが，形式的には異なっていても，実勢的な要素関係においてはほぼ同じ内容であると考えてもよいであろう。この点では一種の普遍性が見られる。たとえば，それぞれの最初に存在文，又は登場文があり，そこでの自明的な時間の枠の設定がこの物語の出発点になっている。又，それぞれの２番目の文中で核となっている *tři syny, three sons,* 「息子ヲ３人」は，３番目の文中では代名詞化されて，(*z*) *nich,* (*of*) *them,* 「ソノ（中デ）」となり，２番目の文の核によって暗示的に示されて３番目の文の基礎の中心となる *Nejstaršího, the eldest,* 「一番年上ノ息子」を付随的に支える機能を果している。この点以外にも，Weil の言う“語順によって表現される主観的な動き”（前述）は，各言語に共通な要因と考えられる。

ここで，(7) c. におけるテキストの展開を中心にして再度検討してみたい。このタイプは，他の言語の場合と同様，日本語においても典型的な語り方と思われるからである。

最初の文は導入であり，基礎となる「ムカシ」の後に，助詞「ガ」のついた「一人ノ王ガ」が

用いられている。これは(7) a. の *jeden král*, (7) b. の *a king* に相当する形であり，従って，助詞「ガ」は紹介・提示の役割を持つ。この意味で，「ガ」を用いることは，一般的には英語で不定冠詞 *a, an* を用いることと共通点がある。もちろん(7) b. の *there was* の役割は無視できないが，日本語でもこのような導入部をより綿密な形にすれば，「ムカシ　ムカシ　アルトコロニ」となるであろう。しかし，導入の基本的役割は「ガ」に与えられている。つまり，「王ガイマシタ」だけでもよく，(6)で述べられている説明と一致する。そして，Mathesius (1939) ではまだ明確化されていないが，Firbas 等の CD による説明を適用し，プラハ学派の用語を用いれば，「ガ」は「王」の CD を高め，「王」を実勢化又は前景化[9]し，2番目の文の基礎となる資格を持つようにする。2番目の文頭には「ソノ王ハ」という句が置かれているが，「ソノ」によるダイクシスと助詞「ハ」は協力関係にあり，最初の文中の核である「王」を2番目の文の基礎とする役割を持つ。「ソノ」はしばしば英語の定冠詞 *the* と対比されるが，「ハ」にもそれと共通の機能が認められる。すなわち，同じくプラハ学派の用語を用いれば，「ハ」は「王」の2番目の文中における CD を低め，自動化又は背景化[10]し，「ハ」に続く部分，特に「息子ヲ三人」を実勢化又は前景化し，この文の核となるようにする[11]。実際に，日本語のテキストでは，「ソノ王ハ」という基礎の部分を表現しなくても，すなわち，(7) c. の2番目の文は「息子ヲ3人持ッテイマシタ」だけでも，ほとんど誤解は起らないであろう。(又(7) a. でも，2番目の文は *ten* がなくても，すなわち *měl tři syny* だけでも通ずる可能性がある。) しかし，(7) b. では2番目の文の *he* はおそらく省略を許されない。すなわち，やや一般化した表現を用いれば，現代英語では個々の文の持つ形式面での自己完結性が，少なくとも日本語よりも高い，又は文脈依存度が日本語より低い，と言える。

この点は，現代英語において，実勢的文構成と形式的文構成との間の差を感じにくくさせる一因となっている。言いかえれば，現代英語には一般に，両者の葛藤を固定的な文法化した手段で解決しようとする傾向が見られる。もちろん，日本語でもそれは可能であるが，英語ほど文法化してはいないように思われる。

この関係は，さらに3番目の文でも同じような形で示される。(7) c. の3番目の文の基礎として，「ソノ中デ　一番年上ノ息子ニハ」が文頭に置かれているが，「ソノ中デ」は，2番目の文中の「息子ヲ3人」と意味的に関連する。ここには前述の「王ハ」の「ハ」のように明確な標示はないが，やはりこの文中では背景化して，「一番年上ノ息子」という基礎の中心を支えている。そして「ソノ中デ」も省略可能であろう。3番目の文の核は「オ嫁サンヲ探シニ世ノ中ヘ出テミヨウトイフ考エガ浮カンダ」であり，その中心は「オ嫁サンヲ探シニ世ノ中ヘ出テミヨウ」である。そして，このままの語順では，「世ノ中ヘ出テミヨウ」の CD の方が高いように感じられる。(Mathesius のこの論文の第6パラグラフには，実際に(7) a. に直接続くものとして，*Rozloučil se s otcem a bratry,* …(かれは父と弟たちに別れを告げた…) という文が示されている。) しか

し，ほぼ同義的であるが語順を変えた文「世ノ中ヘ出テオ嫁サンヲ探ソウ」では，「オ嫁サンヲ探ソウ」の方がCDが高まるであろう。この関係は微妙であるが，一般に文の前方よりも後方に位置する要素の方がCDが高い，と言えそうである。これは，Firbasの言う“CDの基本的配分”の原理，すなわち，実勢的文構成では，CDの低い要素から高い要素へという配列が基本的法則であるという考え方（ただし，これは久野（1978）の旧から新へのインフォーメーションの流れの原則とは異なる。）と一致するように思われる。これらの問題については，さらに後述する。

Mathesius（1939）では，さらに物語の導入部の分類を行ない，時間又は場所の設定を伴なう書き出しのもの（たとえば「ムカシアル所ニ…」）を基礎開始；最初の文でいきなり主人公の出て来るもの（たとえば「狩人ハアル日狩ニ出カケタ」）を，本来は最初にあるべき存在文を加えて縮約したもの（すなわち「狩人ガイタ。ソノ狩人ハ…」の縮約）と見なして縮約開始；さらに単純な存在文だけのもの（たとえば「王ガイタ」）を露出開始と呼んで，それらの諸タイプが芸術的な作品の中でもあらわれることに注目している。

ただし，あわただしい日常的な会話の中では，修正の余裕のある状態，特に書き言葉よりもはるかに豊富に，実勢的文構成を示す図があらわれることが指摘されている。それはその場面に参加する人たちの生活と日常経験の近さによって，発話の基礎となり得る主題又は情況が異常に広がるためとの説明があり，特に縮約開始が目立つことが述べられている。これは話し手が，聞き手がその題材をもう知っていることを前提にしているからであろう。（文学作品でも，たとえば島崎藤村の『夜明前』の「木曽路はすべて山の中である」などの実例がある。）その他，日常会話では，省略，倒置などが絶えず行われると考えられているが，その多くは実勢的文構成の立場から前述の基礎⇄核の関係で説明できるかも知れない。それに関する手がかりは，Mathesius（1939）中の語順についての次の記述にも求められる。

(8)　発話の出発点と発話の核は，いくつかの語句で構成されている場合には，文中でさまざまにからみ合っているのが通例である。しかし，にも拘らず，文のどの部分がまず出発点として受取られるか，およびどの部分がまず発話の核として受取られるか，きまったように言える。同時に，正常な過程は，発話の出発点が文の始めの部分に置かれ，一方発話の核は文の終りの部分に置かれることである。この順序を客観的語順と呼ぶことができる。なぜなら，この場合は知っているものから知らないものへと進み，聞き手には，それによって，言われていることの理解が容易になるからである。しかし又，それとは反対の順序もよくあり，その場合はまず最初に発話の核がやって来て，その後にやっとその出発点が来る。それは主観的語順で，その際，話し手は，知っているものから知らないものへという自然の過程を無視して，発話の核に非常にとらわれ，核を最初の部分に置くようになっている。そのため，この語順では，発話

の核に特別な強めを付加する。それは次の二つの文を比較することから容易に認識される：*Dala jsem za ni dvacet korun.*（わたしはそれに対して，20コルナ与えた。）＝客観的語順——*Dvacet korun jsem za ni dala.*（20コルナを，わたしはそれに対して与えた。）＝主観的語順。…中略…実勢的文構成の際に，客観的および主観的語順の要求を満たすための諸手段は，ほとんど各言語ごとに異なり，その研究は非常に重要である。この研究に属するものは，ただ語順だけではなく，筆者（Mathesius）が英語に関して示したように——Mathesius（1947）pp. 277-285 参照——たとえば受動叙述なども含まれる。（第7パラグラフ）

この引用部分で述べられている客観的語順は，前述の Firbas による“CD の基本的配分”又は“自然の順序”（Ordo naturalis）と一致するものである。ただし，いかなる言語の文法も，多かれ少なかれ，主観的語順も正当化して取り入れているように思われる。たとえば，疑問詞と呼ばれる語の仲間は，それ自体，核としての機能を持つであろうが，文頭に来る可能性が大きい。Mathesius (1961) には，各言語における一般的な語順決定の原理として(1)文法；(2)リズム；(3)実勢的文構成があげられている（同書 p.180以下）が，それぞれの言語における標準的な CD の配分と語順は，必らずしも客観的語順ではない。たとえば，日本語の場合，標準的語順として，動詞的要素を文末に置くという文法的規則があるため，核の中心がその直前に来る可能性が大きい。その問題については飯島（1977），（1983）で一部論じたが，本小論中では，(4) a. b. c. のそれぞれにおける，*this letter*, *tenhle dopis*,「コノ手紙ヲ」の位置などを参照，対比されたい。そして，日常的な会話の中では，ある種の興奮を示す主観的語順が非常に多いことも否めない。たとえば「困ッタナ　コレハ」とか「行キタインダ　アメリカヘ」などは，イントネイションの問題を別にすれば主観的語順と言うべきであろう。

さらに，前述の日本語における助詞の「ハ」と「ガ」の使いわけも，この立場から見れば，客観的語順と主観的語順として説明できよう。すなわち，(4) c. は客観的語順，(5) c. は主観的語順であり，(5) c′. は客観的語順を守り，形式的文構成と実勢的文構成の間の葛藤を解決するための工夫と言えるだろう。そして一般に，「ハ」は客観的抽象化，又は一般化もしくは相対的関係を含みとする傾向があり，「ガ」は主観的具体化，又は特殊化もしくは絶対性を暗示する印象がある。「ハ」と「ガ」の差は，これだけで説明できるわけではないが，たとえば(9) a. b. および(10) a. b. を比較されたい。

(9)　a.　日本ハ　経済大国デアル。
　　b.　日本ガ　経済大国デアル。

(10)　a.　男ハ度胸　女ハ愛嬌。

b.　男ガ度胸　女ガ愛嬌。

もちろん程度の問題ではあるが，(9) a. は“日本について説明すれば”という前提，(9) b. は“経済大国の例をあげれば”という前提をつけて考えられ，又，(10) a. は男，女双方にまたがり，(10) b. は男と女と分離される感がある。そして(9)，(10)の各組で，それぞれ a. の方が b. よりも標準性が高い，又は無標とすべき表現と思われる。しかし，この判断は直観に頼っているので，別の意見もあり得る。ただ，(10) a. b. についてもう少し補足すると，(10) a. は客観的語順，すなわち基礎から核へと順接的であり，(10) b. は主観的語順，すなわち核から基礎へと逆接的であると言える。「ガ」には，いわゆる逆接の接続詞としての用法が認められるが，この現象と何か関係があるかも知れない。少なくとも「ガ」には思考の逆戻り，又は一旦停止をうながすはたらきがありそうである。

Mathesius (1939) の示唆は，上述のようにさまざまな思考を誘発するように思える。特に，FSP に関する基本的概念は，現在でもほとんどそのまま応用できるであろう。そして，この論文の最後には，さらになされるべき研究の分野と方向が明示されている。すなわち：

(11) 上述の諸例から見られるように，筆者はただこの論文の中で直説法の独立文のみに限定したが，それは定動詞を持ち，そして先行する質問に対する答えではないようなものである。筆者がそうしたのは，主として次の理由である。すなわち，われわれが探究した諸問題は，それらの文において最も明らかにあらわれる。それは又，話し言葉および単純な書き言葉の散文中で最もひんぱんである。…中略…さらに続く研究のためにまだ十分な材料が残っている。さし当り除外しておいた資料，つまり他の種類の直接法独立文，疑問，命令，感嘆，希求の各種の文および複合文ばかりでなく，さらに何種かの，ここに属しながら筆者が触れなかった，文体論的に微妙な色合いを持つ文があるだろう。これからの課題は，具体的な資料に対して，形式的文構成および実勢的文構成の間の関係を示すことであろう(12)。なぜなら，そのことによって初めて，ここに説明されたすべてのことの正当な重要性が示されるからである。(第8パラグラフ)

すでに1世紀半も前に Weil が手をつけ，そして半世紀も以前に Mathesius が提示したこの課題はまだ十分な生命力を保っており，FSP に関するその基本的概念は，普遍的法則を背景にした，諸言語の特性の解明の手がかりを提供しているが，明確な結論に達する道はまだ遠い。

〔注〕

(1) 原語は aktuální členění větné (又は věty)。

(2) たとえば Halliday の諸著作。

(3) これらの用語は，意味を限定するには“陳述の出発点”と“陳述の核”と邦訳した方がよいと思われる。Mathesius (1961) の邦訳参照。

(4) Mathesius は，なぜか1955年としているが，これは誤りである。なお，この Weil の著作（ただし1869年の第2版）の貴重なコピーを，武蔵大学教授竹内公誠氏の御尽力で手に入れることができた。この機会に，同教授にあらためてお礼申しあげたい。

(5) 原文は：a. Idem ille Romulus Romam condidit; b. Hanc urbem condidit Romulus; c. Condidit Romam Romulus.（同書 1869². p. 24）

(6) 同書 p. 44. 日本語は動詞的要素の位置にかなり強い規制があるので，どちらのグループに入るか，決定が簡単でない。

(7) Firbas (1971), (1974) 参照。なお，それぞれの原語は，téma; réma; přechodník である。

(8) これは Firbas の用語である“テーマ”とは異なる。

(9) 原語は akutualizace. 英訳ではしばしば foregrounding とされる。

(10) 原語は automatizace. 一般に遠近法的構成の中で背景化して目立たなくなることを言う。

(11) 恣意的な例になるのを防ぐために，1989年10月14日に関西学院大学で行われた日本言語学会シンポジウム〈日本語と言語理論〉で用いられた例の分析を追加する。以下の a. b. は，同シンポジウムの文法論のハンドアウトにある例文（原文のまま）である。

a. 昔々，おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へ芝刈りにいきました。おばあさんは川へ洗たくに行きました。

b. 昔々，おじいさんとおばあさんがありました。ある朝おじいさんが山へ芝刈にいきました。しばらくしておばあさんが川へ洗たくに行きました。

a. および b. の最初の文はそれぞれ「ガ」を用いた存在文又は登場文であり，「ガ」はその前にある語「オジイサン」と「オバアサン」が核の中心語であることを標示し，両者が後続の文の基礎となる資格を与えている。従って，第2の文の基礎としては，両者を同時に用いる（たとえば「オジイサントオバアサンハ　山ト川ノ間ニ住ンデイマシタ」など）ことも可能である。ただし，a. の例では第2の文に「オジイサン」，第3の文に「オバアサン」が，それぞれ「ハ」をつけて基礎として用いられている。つまり，第1の文には核の中心として2語があったが，第2，第3の文でテキスト内に二つの流れ，又は分裂が生じたと言える。図示すれば，次のようになろう。

①オジイサントオバアサンガ…↗②オジイサンハ…→
　　↘③オバアサンハ…→

実際に，第2の文「オジイサンハ　山ヘ芝刈リニイキマシタ」に直接続くと思われる文は，「山」以下の部分，すなわち第2の文の核と意味的に関係すべきものを基礎とするから，「山ハ動イテイマシタ」とか「芝ハ枯レテイマシタ」などであろう。そして，例の第3の文に続くのは，「川ヘ洗タクニ行キマシタ」と何等かの内容的連絡を保つべき基礎を持つのが自然である。

一方，b. の場合は，第2の文，第3の文でそれぞれ「ガ」が用いられ，「オジイサン」と「オバアサン」が核となっていわば再登場する。すなわち，テキストの進行から言えば，改めて出発点に戻ることになるであろう。図示すれば次のようになる。（ただし，例文そのものでは，「ある朝」「しばらくして」が前文と脈絡を保つため，又は新しい基礎を与えるために用いられている。）

①オジイサントオバアサンガ…→
　　←
②オジイサンガ…→
　　←
③オバアサンガ…→

このような「ハ」と「ガ」の使用が，テキストの結束性と関係することは十分に予測できるが，結束性には他の諸要因も影響するので，さらに検討を要する。

(12) もちろん Mathesius はこの線に添った多くの研究をその後も発表している。Mathesius (1947), (1982) 参照。

参考文献

Daneš, F. (1964) 'A Three-Level Approach to Syntax'. *Travaux Linguistiques de Prague* (*TLP*) 1. *pp.* 225–240., Prague.

———— (ed.) (1974) *Papers on Functional Sentence Perspective*, Prague.

Daneš, F., Viehweger, D. (eds.) (1977) *Probleme der Textgrammatik Studia Grammatica XVIII*, Berlin.

Firbas, J. (1964) 'On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis'. *TLP* 1. *pp.* 267–280.

———— (1966) 'Non-Thematic Subjects in Contemporary English'. *TLP* 2. *pp.* 239–256.

———— (1971) 'On the Concept of Communicative Dynamism in the Theory of Functional Sentence Perspective'. *Sporník prací fil. fak. Brno. A.* 19. *pp.* 135–144.

———— (1974) 'Some Aspects of the Czechoslovak Approach to Problems of Functional Sentence Perspective'. Daneš (1974) *pp.* 11–37.

———— (1979) 'A Functional View of ORDO NATURALIS'. *Brno Studies in English* 13. *pp.* 29–59.

Firbas, J., Golková, E. (1976) *An Analytical Bibliography of Czechoslovak Studies in Functional Sentence Perspective*, Brno.

Halliday, M. A. K. (1974) 'The Place of "Functional Sentence Perspective" in the System of Linguistic Description'. Daneš (1974) *pp.* 43–53.

Halliday, M. A. K., Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*, London.

飯島　周 (1974)「文要素の配列に関する一考察」『跡見学園女子大学紀要』(『紀要』) No. 7. *pp.* 1–8.

———— (1975) 'The Basic Distribution of Communicative Dynamism in Japanese'.『紀要』No. 8. *pp.* 1–8.

———— (1977) 'A Note on the Rheme and Rhematization'.『紀要』No. 10. *pp.* 1–10.

———— (1980)「伝達動力について」『紀要』No. 13. *pp.* 120–130.

———— (1983)「機能的文構成における焦点化について」『紀要』No. 16. *pp.* 1–12.

久野　暲 (1973)『日本文法研究』東京．大修館．

———— (1978)『談話の文法』東京．大修館．

Mathesius, V. (1907) 'Studie k dějinám anglického slovosledu'. *Věstník české akademie* 16. *pp.* 216–75, Prague.

———— (1908), Studie k dějimám anglického slovosledu'. *Věstník ceské akademie* 17. *pp.* 195–214, 299–311, Prague.

———— (1911) 'O potenciálnosti jevu jazykových'. *Věstník Královské české společnosti nauk 1911–12, třída filozoficko-histricko-jazyko-zpytná č. 2. pp.* 1–24. Prague. Vachek (1970), Mathesius (1982) に再録.

———— (1929) 'Funkční lingvistika'. *Sborník přednášek pronesených na Prvém sjezdu čs. profesorů filozofie, filologie a historie v Praze 3.–7. dubna 1929*, Prague, *pp.* 118–130. Vachek (1972), Mathesius (1982) に再録.

———— (1936) *Nebojte se angličtiny! Průvodce jazykovým system.* Prague. 邦訳 (1986) 千野栄一・山本富啓『マテジウスの英語入門　対照言語学の方法』東京．三省堂．

——————— (1939) 'O takzvaném aktuálním členení věty'. *Slovo a slovesnost 5. č. 4. pp.* 171–174, Prague. Mathesius (1947), (1982) に再録.

——————— (1974) *Čeština a obecný jazykozpyt*. Prague.

——————— (1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*, Prague. 英訳. (1975) *A Functional Analysis of Present Day English on a General Linguistic Basis*. Haag-Paris Praha. 邦訳 (1981) 飯島 周『機能言語学 一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』東京. 桐原書店.

——————— (1982) *Jazyk, kultura a slovesnost*. Prague.

Saussure, F. d. (1916) *Cours de linguistique générale*. Paris. 邦訳 (1972) 小林英夫『一般言語学講義』東京. 岩波書店.

Sgall, P., Hajicová, E., Buránová, E. (1980) *Aktuální členení věty v češtině*. Prague.

Vachek, J. (ed.) (1964) *A Prague School Reader in Linguistics*. Bloomington-London.

——————— (1966) *The Linguistic School of Prague. An Introduction to Its Theory and Practice*. Bloomington-London.

——————— (ed.) (1970) *U základu pražské jazykovědné školy*. Prague.

——————— (ed.) (1972) *Z klasického období pražské školy* 1925–1945. Prague.

——————— (ed.) *Praguiana Some Basic and Less Known Aspects of the Prague Linguistic School*. Amsterdam-Philadelphia.

Weil, H. (1844) *De l'ordre des mots dans les langues anciennes comparées aux langues modernes. Question de Grammaire Générale*. Paris.